
魔法少女リリカルなのは 紅き熾天使が見つける答え

秋稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 紅き熾天使が見つける答え

【Nコード】

N 8 6 1 7 P

【作者名】

秋稀

【あらすじ】

作られた機動兵器達は戦いの先に自らの答えを見つけられるか。

注意：この物語には原作崩壊などがあります。そこを注意して読んでください。

それと、もう一つの小説を中心に更新していくので、こちらは不定期となります。

プロローグ（前書き）

あけましておめでとございます。

もう一つの小説が途中ですが、久しぶりにアーマードコアをやった
ら思いついたので書いてみました。

ブローグ

side???

色々な部品が転がっている部屋の中、その中心に紅と白の人型機動兵器が鎮座していた。

そこに

「何度も言っているでしょう！ 私はあの子達を渡さない」

「フィオナ博士・・・何故っ！ あの2機があれば次元世界の平和
g「何が次元世界の平和ですか」・・・どという意味です？」

「管理局がやってるのは、平和という名を免罪符にした強盗と侵略
ですよ」

「我々はそんなことしてませんか？」 していないっ！」

「・・・管理外世界にあるロストログアを強奪、そして未開拓世界
の侵略、これがその証拠です」

「そんな・・・嘘だ・・・」

「では、お帰りください」

機動兵器が鎮座している部屋の向こうから、男女の口論が聞こえていた。

そしてドアが閉まる音が向こう側から響く。

すると白衣を着たクールな感じの女性が部屋に入ってきて、二機の人型兵器の端末に触れる。

「おはようセラフ、グリント」

キュインキュイン

彼女の声に反応してセラフとグリントは頷く。

「うん、良い子ね・・・全く管理局もしつこいのよ、私の子供を渡せなんてーブツブツ」

キューイ？ キューイ？

彼女が一人で呟き始め、二機は状況が分からず首を傾げる。

「はっ！ ごめんごめん自分の世界に入ってたわ、えー今日は・
・言語機能のインストール、武装とシールドの確認及び強化か・
・やっと話せるねセラフ、グリント」

キュインキュイン

二機も彼女と話せることを、楽しみにしていたかのように首を振る。

「ふふっ、それじゃ始めましょうか」

嬉しそうに彼女は手元の端末を操作する。

彼女の子供である二機と幸せに過ごす為に。

s i d e o u t

依頼

六年後・・・

sideグリント

セラフとグリントは調整部屋で、もうすぐ起動する二機の妹たちの整備をしていた。

すると

「セラフ、ちょっと依頼がきたから、私の部屋に来てくれない」

研究所内に放送が流れる。

『・・・グリントすまない、後を頼む』

『うん、了解よ・・・後で何をしたか聞かせてよ』

『了解だ』

セラフはやっていた作業に一区切りを付け、部屋から出た。
グリントに見送られながら。

『・・・妹達が目覚める前に帰ってきなさいよ』

s i d e o u t

s i d e フイオナ

『失礼する』

「忙しい時なのに、ごめんなさいね」

『それはドクターも同じだろう、それに現在忙しくなってるのはグリントだ、謝るならグリントに謝ってくれ・・・それで頼みとは？』

セラフがそう言うと、フィオナが真剣な顔つきになった。

「地上本部からの依頼よ、依頼主はレジアス・ゲイズ中将」

セラフの正面のモニターに空港火災の映像が映る。

「現在ミッドチルダで空港火災起きており、空港内に取り残された人たちがいます」

映像が空港内の見取り図に変わり

「地上部隊が救出に尽力してますが、この状態だと間に合いません」

見取り図に突入ルートと脱出ルートが表示された。

「あなたには生体反応がある位置に迅速に向かい、救出をお願いします」

「なお援軍で「海」の魔導士が出動してますが・・・出来る限り「陸」で解決したいと考えています・・・報酬は用意しますので、こ

の依頼受けてもらえませんか」

そして映像が切れ、フィオナがセラフを見る。

「セラフあなたが決めなさい」

『その依頼、受ける・・・「陸」が人材不足なのは知っているからな、それに中将に借りが出来ればドクターも楽になるだろう』

「・・・ありがとうセラフ、時間ないけど準備はいい？」

『ああ』

「なら射出するから、カタパルトデッキに行つてちょうだい」

そう言つてフィオナはキーボードを打ち依頼を受諾する旨を送り、準備をする。

『了解だ』

そしてセラフは部屋から退出した。

部屋に独りになったフィオナが、カタパルトの準備をしながら呟く。

「私が楽になるか．．．．．考えたこと無かったな」

ちょっと嬉しい気持ちになるフィオナだった。

s i d e o u t

少女と熾天使

side???

空港は既に火の海となっており、崩れ落ちるのも時間の問題である。

そして、空港のロビーに逃げ遅れた少女が一人彷徨っていた。

「お姉ちゃんどこお」

少女は怖い気持ちを抑えながら姉を探すために歩く。

だが、火で脆くなった建物の一部が少女の近くに落下し、その衝撃で少女は吹き飛ばされた。

「うつうつ・・・痛いよお・・・怖いよお・・・お父さん、お姉ちゃん」

少女は足を怪我したのか、その場で動けなくなる。

この間にも建物の崩れゆく音が響く。

「誰かぁ・・・たすけてえ」

ついに少女は恐怖に耐え切れなくなり、泣き始めたが……

ズガァン！ ズガァン！

少女の助けを求める声は届いたようだ。

ズガガァン！

「ふえっ！？」

少女の正面の壁が破碎され、それは飛び出た。

少女が顔を上げ目に映ったのは……

「……あかい……天使」

side out

side セラフ

「・・・あかい・・・天使」

『救助者一名発見・・・』

セラフは通信で管理局員に連絡を送った。

そして少女の目の前に着地し、膝を着いて手を差し伸べる。

『立てるか？』

「あ・・・うん」

少女はセラフの手を取り立ち上がる。

『怪我は・・・火傷と打撲か、少し我慢しろ』

「え？・・・きゃ！？」

セラフは少女を右腕で抱える。

『む？ レーダーに反応・・・動体反応がした方に向かっている、

援軍か？』

p i p i

思考している時に通信がきた。

「こちらゲンヤ三佐だ、聞こえるか？ レイヴン」

『聞こえる』

「ついさっき援軍の魔導士が突入した、お前さんは今いる救助者をこちらに連れて来てくれ」

『了解「あ！ お父さん」・・・だ』

静かにしていた少女が、急に声を上げた。

すると通信越しのゲンヤ三佐が驚くが

「スバル！・・・レイヴン感謝する」

仕事の途中なので大っぴらに喜んではいないが、嬉しそうにしてい

る。

『ゲンヤ三佐、これよりそちらへ向かう』

「ああ、よろしく頼む」

そう言って通信は切れた。

『しっかり掴まれ』

そしてセラフはスバルを抱えなおすとブーストを使い、走り始める。

すると

「ねえ、レイヴンさんっていつの？」

しがみ付いていたスバルが話しかけてきた。

『・・・それは仕事の名だ』

「じゃあ本当の名前教えて」

このときセラフは困惑していた。

今まで人と関わってきた事は何度か会ったが、スバルのような純粋に知りたいという目的で聞かれたことが無かった・・・というか教えてほしいと面と向かって、言われた事が今までいなかった。

だから現在、悩んでいる。

（教えていいのか？　ドクターには特に秘匿されては無いが・・・
・・・教えたところで別に害は無いが、それにこの少女・・・スバル
が忘れるだろう・・・ならば）

「ねえ、教えてよお」

『・・・セラフだ』

「セラフ？」

『そうだ・・・ドクターからセラフと呼ばれている』

「そうなんだあ、わたしはスバルっていうんだ」

スバルはにこにこしながら自己紹介した。

『ああ・・・む？ 瓦礫で塞がったのか』

脱出ルートの出口に着いたとき、そこは瓦礫で塞がっていた。

『排除するだけだ・・・スバルしっかり掴まれ』

「うん！」

ヒュン ギュオン

左腕のレーザーブレードで邪魔な瓦礫を破碎して外に出る。

『大丈夫か』

「へいきだよ」

そして外に出たセラフはスバルを医療班に預ける。

そのとき

「また、会える？」

『・・・機会があれば会えるだろう』

「じゃあ、楽しみに待ってる！」

このときセラフのA・Iに不可解な負荷が掛かり

『ザー・・・しは・・・待つて・・・ザザー』

ノイズの入った映像が一瞬流れた。

（理解不能／思考にノイズがハッセイ／この原因のカイセキ／問題に対するコタエ無し／推奨される選択／）

セラフはこの負荷に疑問に思ったが、不思議と嫌な感じがしなかった。なので気にしなかった。

『そうか』

そう一言だけいってその場から上昇する。

そして

『任務完了、これより帰還する』

一言通信を入れた後、飛行形態へ変形

キュオン シュイーーーーン

オーバードブースト（OB）を使用し、その場から移動した。

このときセラフは気づかなかった、三人の局員がこちらを見ていたことに・・・

s
i
d
e
o
u
t

管理局

side???

セラフが飛び去った方を睨んでいた3人は、幼馴染たちと合流するために移動する。

「・・・今のは転生者か？」

褐色肌で白髪 of 青年が、他の二人に疑問を投げ掛けた。

「どうだろう？ でも・・・ナインボールセラフとは思わなかったけど」

黒髪で身体 of ラインが細い青年がその疑問に答える。

「クソッ！ あの野郎のせいでフラグが立てられなかった」

青髪 of 青年は悪態をつくだけで疑問に答えなかった。

その姿を見た青年一人が苦笑する。

「そついや、陣はスバル狙ってたんだっけ」

「・・・アニメの時よりもなのは達の行動が遅かったな・・・あいつには感謝したほうがいいかもしれんな」

「あ！？ 修弥！ なんであいつに感謝しなきゃいけないえ！」

青髪・・・陣と呼ばれた青年は白髪・・・修弥を睨む。

修弥はそれを見て、肩を竦ませながらも答える。

「はあ・・・陣この世界に転生するとき、神に言われたろ」

修弥は陣に覚えてないかと聞いた。

「・・・なにを」

その言葉に修弥は呆れた。

「お前は・・・いや、神が言ったのは「限りなくリリカルなのはの世界に近い、平行世界だろ」・・・私の台詞を取るな・・・煉」

修弥が言おうとしたのを黒髪・・・煉と呼ばれた青年が先に言う。

「それが何だよ」

「分からないか？ 今日、なのは達と私達が来るのが遅れただろう・
・この世界のスバルは空港火災でなのはに助けられないスバルだ
った、そういうことだ」

「むーそう考えると、あいつ転生者じゃないかもな」

修弥の言葉に煉はセラフに対する認識を少し変えた。

一方の陣は理解はするが納得は出来ない、という感じだ。

「陣、前にも言ったがアニメとこの世界を結びつけるのはやめろ、
それはこの世界に生きる人を侮辱している・・・俺達の持っている
原作知識は絶対じゃないことを理解しておけ」

彼らが話し合っている間に目的の場所に着いた。

一人の男に暗い感情を持たせて。

side out

sideセラフ

セラフは研究所につくと、異変に気づいた。

攻撃を受けたときのみ展開される、隔壁シエルターが降ろされていた。

『こちらセラフ、ドクター聞こえるか?』

「ん? 聞こえるよ」

『隔壁が降ろされてるが、何かあったのか?』

「あー・・・管理局の馬鹿共が、うちの子を奪いに来たんだよ」

『現在位置と人数は・・・』

「座標をいま送るよ、人数は8人、「海」の魔導士7人と騎士1人、

一応グリント達が武装テストを兼ねて出てる、排除レベルは・・・
4でいいや、あっちから喧嘩売ってきてるから」

『了解だ・・・場所はアリーナか』

そしてセラフは隔壁が解除された道をブーストで駆け抜ける。

進入者を排除するために

s i d e o u t

s i d e グリント

グリントと起動したばかりの妹2機は、現在アリーナで局員達と対峙していた。

「その二機を渡してもらおう」

『何故です?』

「管理局の正義のために使『断る、あなた方の組織に正義など無い』
・・・なんだと!？」

グリントの言葉に管理局員が殺気立つ。

『それに私達を使うという考えが、気に入らない・・・・・・だからお帰りください、今なら怪我をしないで帰れますから』

「それは私達が怪我をするということか? ・・・烈火の将を舐めるなよ、多少壊しても持ち帰ればいいのだからな」

女の騎士・・・シグナムの一言で局員達は戦闘態勢に入った。

その意思を聞いたグリントたちは

『交戦の意思を確認、さあ私たちの力を見せてあげましょう・・・
レイテルパラッシュ、アステリズム』

『了解』

『『戦闘モード起動』』

ドガガガガン！

不意打ちで魔導士達が幾重ものバレットをグリント達に浴びせた。

そのせいでグリント達の場所が煙で見えなくなる。

「この程度か・・・全員、確認でき次第っ！？ 散開しろっ！」

何かを感じ取ったシグナムが即座に命令を出したが、反応し切れなかった局員三人が打ち抜かれ鮮血が舞う。

『「海」の魔導士の攻撃とはこの程度ですか』

『話にならん』

『弱い』

煙の中からグリント、レイテルパッシュ、アステリズムの3機が率直な感想を述べる。

煙が晴れたそこには、3機の周囲を包むように守る緑の粒子・・・

プライマルアーマーが展開された3機がいた。

「シールドかつ！ 私がやる、その間に負傷者を転送させる！」

ガキンッガキンッ

『ふむ、貴様はそいつらより気骨があるな』

負傷していない局員の一人は、シグナムがレイテルパラスシュと戦りあつてゐる間に、脱出させようとしたが

転移陣が霧散した。

「な、なにっ！」

『ここでは転送系の魔法は使えませんよ………出れるのは、あそこの隔壁からだけ』

静観していたグリントは戦う意思の無くなった局員に、もう興味はないと言外にいつて、脱出できる場所を指差した。

そして負傷している局員を背負った二人は隔壁へ向かう。

するじ

ン・・・シュン・・・シュンシュン

何かが隔壁を開きながら、近づく音が隔壁の向こうから聞こえる。

・
・
・
・
・
・
そして

シューーン

アリーナの隔壁が開き、そこから現れたのは

『ターゲット確認・・・排除開始』

セラフだった。

s
i
d
e
o
u
t

事後処理（前書き）

傭兵会社の名前を変更しました

事後処理

sideフィオナ

セラフがアリーナに到着し、局員を排除している間

「では、レジアスさん「海」への対応よろしくお願いします」

「ああ、分かった・・・出来る限り手は尽くす」

フィオナがレジアスと今後の対応について話していたが、その話も
終わり場の空気が柔らくなる。

「・・・今日は本当に助かった、礼を言う」

「実際にやったのはセラフですから、彼に言って下さい・・・それに
私達は傭兵ですから報酬分は働きますよ」

それを聞いたレジアスは笑う。

「がっはっはっはっは！ 傭兵か・・・オーリスと同期だった娘が
言うようになったなあ」

「私だって大人になりますから！」

p i p i p i

突如フィオナに連絡が入り、レジアスが出るように促す。

「失礼しますね・・・セラフ終わった？」

『排除完了した、こいつらの処遇は？』

「あー・・・どうしよう・・・」

フィオナは悩んでいると

「相変わらず詰めが甘い・・・データと一緒に地上本部に送れ、後は私がなんとかしよう」

「え！？ いいんですかつ！」

フィオナの変わりように苦笑しながら

「悪いのは私達の方だからな……それと、セラフ……でよかったか？」

『ああ』

「今日は民間人を救助してもらったことを感謝する」

通信越しだったがレジアスは頭を下げた。

『依頼を遂行しただけだ……だが感謝されるのは悪い気がしないな』

「ふっ、また何かあったときは依頼させてもらおう」

『ああ、了解だ』

「……じゃあレジアスさん後は頼みますね」

話が一区切りついたのを見て、フィオナは話を切り出した。

「ああ、分かった・・・身体には気をつけるよ」

「はい！ オーリスによろしく言っと言って下さい・・・それと傭兵会社アナトリアを今後も、ご贖戻よろしく願います」

「がっはっはっはっは、伝えておく、ではな」

通信が切れた後のフィオナの顔は、いつもより嬉しそうだった。

しかし、すぐその顔は引き締められ

「セラフ、そいつらを転送装置の所まで、皆で運んでちょうだい」

『了解』

セラフからの通信が来るまでの間、フィオナはある人物から送られてきた二つの資料を見る。

「管理局・・・最高評議会が動き出してるか・・・・・・・・防衛戦力増やそうかなあ」

そしてもう一つの資料に目を通すと、フィオナは静かに天井を見上げた。

「・・・・・・・・・・計画を実行するんだね」

side out

――――5分後――――

転移装置内に倒れている魔導士達は同じように両手両足が折られ、その内数人は身体の一部が欠損していた。

シグナムは五体満足ではあったが、全身の至る所に切り傷と重度の火傷を負っていた。

『ドクター準備完了だ』

「ん、りょくかい・・・座標特定、転送」

転送装置内に赤色の転移陣が顕在した瞬間、局員達が地上本部まで転送される。

「ご苦労様、今日はもうやることはないから自由にしていいよ」

『『『『了解』』』』

フィオナからの通信が切れ、全員が自由になる。

すると

『起動してから会うのは初めてか・・・レイテルパラッシュ、アステリズム』

セラフが妹達に話しかけた。

『そうですね、お兄さん』

『そうだな、兄よ』

二人の受け答えは短い、なぜならA・Iの思考が起動したばかりだからである。

『これからよろしく頼む』

『了解だ（です）』

ものすごく硬い兄妹達のやり取りに、グリントは微笑ましそうに見えるのだった。

「海」と「陸」

side 時空管理局地上本部

とある大会議室に「海」と「陸」の将官、提督等が集まり、モニタがずらりと展開され、その中にはレジアスの顔もあった。

レジアスの右斜め後ろにはオーリスが控え、二人とも・・・いや、陸の将官等全員がすまし顔をしている。

逆に海の将官等の一部を除いて怒りの顔をしていた。

ここでは、先日起きたあることについて話し合いがされていた。

「あの傭兵会社は危険だ！」

一人の海の局員・・・シュート中将がそういうと、会議室の中心にモニタが展開され、様々な情報と映像が流れる。

「この映像にあるように、この傭兵会社が持つ技術は個人が持つには強力すぎる」

現在流れている映像は、アリーナでセラフが局員を圧倒的な力で排除している場面であった。

「だからこそ、我々管理局の手で管理されるべきだ!!」

そして、彼は演説をし始める。

だが、その様子を陸の将官達は冷めた目で見るのだった。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

「————次元世界の秩序と平和のために!!」

やっと演説が終わると、ほとんどの海の将官等は傭兵会社と事を構えるような雰囲気になっていた。

すると

今まで沈黙していたレジアスが言葉を発す。

「要するに協力しないのならば、武力を持って接收するということか」

「その通りです」「ならばその必要はない」何故です?」

レジアスは一泊置いて

「彼らは既に我々に協力しているからだ」

静かに告げる。

「そうですか・・・ですが彼らは管理局員を殺しかけている。この映像にあるように！ 彼らが危険だということには変わりはない！
！ だからこそ、我々の手で管理されるべきなのです！！」

「局員を殺しかけたのは、貴様らが悪いのではないか？」

レジアスがそういった瞬間、さっきまでとは違う映像が流れる。

「ーーーーー気に入らない・・・・・・・・だからお帰りください、
今なら怪我をしないで帰れますから」

「それは私達が怪我をするということか？ ・・・烈火の将を舐めるなよ、多少壊しても持ち帰ればいいのだからな」

「交戦の意思を確認、さあ私たちの力を見せてあげましょう・・・
レイテルパッシュ、アステリズム」

『了解』

『『戦闘モード起動』』

ドガガガガン！

「この映像から分かるように、あの事件は正当防衛ではないか。我々が責められる事はあっても、彼らが責められる謂れはないと思うが？」

「随分、肩を持つんですね」

「……事実を言ってるまでだ、それに彼らは我々に協力している、肩を持って何が悪い」

すると

シユート中将は癪に障る、醜い笑顔を作る。

「いえ、噂で聞いたのですがあ傭兵会社の代表はあなたの友人の娘だそうですね」

シユート中将がそういった瞬間、レジアスは静かに睨み付ける。

「それがどうした………戦友の娘だから肩を持っているとでも」

「いえ、そんなこと思ってませんよあ、あくまで可能性ということですよ」

そして、二人は静かににらみ合う。

「そこまでです」

不意に声が響く。

声がしたほうには伝説の三提督がいた。

すると

「この件に関してはレジアス中將に任せます」

レオーネ相談役がそういうと

「なっ！？ 何故です！」

シュート中將は堪らず質問する。

「簡単なことだ、傭兵会社がある所は陸の管轄・・・海が出る必要もあるまい」

「くっ・・・・・・・・分かりました」

権力のある三提督に言われ、シュート中將はしぶしぶ引き下がる。

「・・・・では議論はここまでです」

その一言で将官たちのモニタが消えていく。

「・・・・ちっ」

シュート中将は舌打ちをして消える。

そして、会議場に残ったのは一部の地上の将官とレジアスであった。

「中将、お疲れ様です」

すると、一人の将官がレジアスに話しかける。

「ああ、ウイン・D少将」

「やはり、海は目をつけていましたか」

そう言いながら近づく、彼女の顔は憂いに満ちていた。

「分かりきっていたことだ、だがワシらはやらねばならん・・・それがあの馬鹿の最期の言葉だからな」

レジアスは強い意志を持った瞳でそう言う。

「そう・・・ですね。あの時、何も出来なかった私たちに託された頼みですからね」

そう言って二人はかつて共に戦った戦友を思い出すのであった。

side out

ある人の依頼

研究所内にある訓練スペース……アリーナで紅と白の2つの影が交差する。

『やるな』

『お前もな』

久々に依頼もなく、つかの間の休日を手に入れた傭兵会社ネクストの日常の一つがそこにはあった。

sideセラフ

『射撃精度が良くなったな』

アリーナでの模擬戦が終了し、セラフとグリントはフィオナの研究室で最終調整を受けていた。

『そうかな、そういうお前も回避が早くなってる』

二人は互いに互いのことを褒める・・・それを近くで聞くフィオナは

「ほんと、仲が良いねえ」

苦笑しながら端末を操作する。

すると

p i p p i カシャン

セラフとグリントに繋がっていたコードが音と共に外れた。

「はい、これで終わりだよ、何か違和感ある？」

『・・・大丈夫だ』

『問題ないよ』

「それは良かった」

調整の終わった二人は研究室から出るためにドアの前に行く。ふと、セラフが扉の前で立ち止まる。

『ドクター』

「ん？ どうしたの」

セラフはスバルを助けたときに再生された映像について聞こうとした………が

『……いや、なんでもない』

聞くべきことではないと思い、言っのを止めた。

「そう………なら良いんだけど」

そして部屋から二人は退出した。

s i d e o u t

s i d e フイオナ

二人が出た後、フィオナはデータに目を通す。

「二人とも動きが良くなってる………このデータを参考に新しい子を」

P i P i P i P i ! !

静寂に満ちていた研究室に音が響き渡り、正面のモニタにある人物が映る。

「ん？ 珍しい・・・あなたから連絡があるなんて、セレ・クロワール」

『久しぶりね、今日連絡したのはミッションを依頼したいからよ』

フィオナは目を細め

「あなたが対処できないことなの？」

『対処はできるけど、私たちはまだ動いてはいけないのよ』

フィオナは「まだ」という言葉に驚く。

「・・・ミッションの内容は？」

『管理者にハッキングを行った研究所の破壊及びデータの回収をお願いします。対象の研究所は3ヶ所』

新たなモニタが現れ、研究所の情報が流れる。

『いずれの研究所は時空管理局が裏で手を引いていることが判明しています。おそらく上層部の一部がレイヤードの技術を欲したものと思われます』

モニタの情報が変わる。

『各施設の防衛部隊はガードメカ数十機、魔導士が複数いると思われます。ただ・・・』

セレは間を空けると、モニタに映る研究所の一つの画面が拡大される。

『この施設に関しては複数人の被験者がおり、防衛部隊で出てくる可能性があります』

「何の実験をしている？」

『・・・強化人間』

フィオナの目が厳しくなる。

『おそらく、この研究所はどこかで手に入れたのでしょうか。かつて強化人間技術を研究していたムラクモのデータ・・・』

「被験者の処遇は？」

『あなたに任せます』

「その依頼、受けるわ・・・期限は？」

『明日だけど、出来るなら今すぐにでも』

手元の端末を弄り登録されているレイヴンとリンクスの情報が出る。

それを検索で明日フリーになっている者に絞った。

レイヴン？ 00 セラフ

レイヴン？ 6 ジノーヴィー・・・デュアルフェイス

レイヴン？ 19 メイトヒース・・・デスマスク

レイヴン？ 21 ジャック・O・・・フォックス・アイ

リンクス？ 00 グリント

リンクス？ 16 霞スミカ・・・シリエジオ

リンクス？ 26 メイ・グリンフィールド・・・メリーゲート

リンクス？ 30 ダン・モロ・・・セレブリティアッシュ

――
――

そして検索に上がった候補を更に、そのミッションを確実に遂行できると思われるメンバーに依頼を受けるかどうかのメールを送った。

「依頼を受けるメンバーが決まり次第、連絡するわ」

『分かりました。連絡をお待ちしてます』

モニタが消え、フィオナは手元の端末を弄り始める。

あらゆるモニタが映っては消えを繰り返し・・・

・・・最終的にある一つのモニタが映し出された。

――強化魔導士計画――

side out

ナニカサレタヨウダ

S i d e 研究所

「被検体？041、？052拒絶反応……死亡を確認、
013安定しています」

暗い部屋の中、複数のポッドに少女や青年達が入っていた。

「？041、052は破棄、013を覚醒させる」

局長と思われる人物の指示で、研究員達は淡々と実験を行う。

013と呼ばれた青年はポッドの中でいくつものコードに繋がり、
投薬されているせいか意識は未だにない。

ビーンビーンビーン

突如、研究所内に警報が鳴り響き、研究員達がうろたえる。

「何事だっ!？」

局長が管制室に連絡を入れると

《施設に向かってくるリンクスとレイヴンを確認しました。防衛部隊で迎撃します》

「リンクス相手では時間稼ぎにもならん。出来損ないをだせ……
・・・ついでだ、？013の対リンクス戦闘データも取るぞ」

s i d e o u t

s i d e リンクス

紅とピンクの機体が月の光に照らされながら、空を駆け抜けていた。

『こちらシリエジオだ、今夜はよろしく頼むぞ』

『了解』

《作戦領域まで後二分で接触します。既に向こうでは防衛部隊が展開されているはず。気を付けて下さい》

フィオナの通信で二人は仕事の雰囲気へと変わる。

『了解、抜かるなよ・・・レイヴン』

『そちらもな・・・リンクス』

そして二人は自分達の戦場へと駆ける。

side out

作戦領域へと侵入した二人に待っていたのは防衛部隊による弾幕であつた。

二人は弾幕を避けながら左右に分かれ、防衛部隊を殲滅し始める。

『敵ガードメカ及びMT09-OWLを確認……………排除開始』

セラフは飛行型から人型へ変形し、地上の防衛部隊に突っ込む。

突っ込んでくるセラフにガードメカとMTはミサイルやバスター力を撃つが、セラフには掠りもしない。

そして一番前にいたMTをすれ違いざまにブレードで切り捨て、そのまま反転しバックブーストをしながらパルスキャノンを連射し、MTの周囲にいたガードメカを破壊する。

一方のリンクス……霞スミカの方は――

『この程度で防衛部隊か……笑わせる』

防衛部隊のミサイルやマシンガンをクイックブースト（QB）で避けながらレールガンとASミサイルを放つ。

『私を倒したいのならリンクスでも雇うべきだったな……まあ、やられはしないがな』

シリエジオから放たれるミサイルによってガードメカは破壊され、MTはレールガンによって貫通し爆散した。

そしてシリエジオは少し離れたところから、こちらを狙う防衛部隊へオーバードブースト（OB）で一気に距離を詰め、殲滅し始める。

sideセラフ

『敵、防衛部隊の殲滅を確認……これより施設内に侵入する』

施設内に侵入しようとしたとき、研究所内から爆発音が響き渡る。

セラフは異変を感じ、侵入しようとしていた扉から離れた。

すると

その扉が吹き飛び、中からオレンジ色の機体が飛び出してくる。

《あれは……旧型のAC？ どうしてそんなものが……》

フィオナが色々と呟く。その間にそのACは建物の上に着地し、セラフを視認した。

飛び出してきたACはセラフの方をじっと見つめ、回線をつなげてきた。

『レイ・・・ヴン・・・・・・・・破壊・・・俺を・・・・・・・・俺を・・・・・・・・・・してくれ』

そう言ったのと同時にオレンジ色のACが攻撃を仕掛けてくる。

『ほとんど廃人と化している？・・・手遅れか・・・せめてもの手向けだ、お前の望みを叶えよう』

接近しながらミサイルとライフルを撃ってくるオレンジ色のACに対し、セラフは正面から受けてたつ。

パルスキャノンを連射し、ミサイルを撃ち落しながらACへと接近していく。そのときライフルを食らうがセラフに当たる直前、緑色の粒子・・・プライマルアーマー（PA）に護られダメージはほとんど無い。

そして、互いに接近した二人はすれ違う瞬間・・・・・・・・

シューイン！！

シュインー！！

二人はブレードを振り抜いた。

ゴトツ……バチバチツ……

・・・オレンジ色のACは左腕が切断、コアの真ん中は斜めに斬り裂かれ、所々から火花が上がり、いつ爆発してもおかしくない状態であった。

『これ……で……解放……される……』

オレンジ色のAC・・・強化人間の被験者の最期は安らかな声音で
そう言つて爆散した。

『状況終了、これより施設内のデータを回収、及び施設を破壊する』

《セラフ、リンクスはもう少し時間が掛かるみたい。研究所内は火
災が起きてるから迅速に任務を達成しなさい》

『了解』

セラフはその場から移動しようとした時、ふと目に付いたものがあ
った。

あのACの左腕を切断したとき、そのまま爆発しないで残ったブレ
ードがそこにはあり、セラフはそのままにするのも気が引け、それ
を自分の格納領域にしまった・・・・・・・・そして・・・

キュイン・・・シューイイイン

セラフはOBを使い施設に突入した。

side out

強化人間

セラフがオレンジ色のACと戦う前、リンクスの方ではある出会いがあった。

ピンクの機体、シリエジオの周囲にはただの鉄屑と化したMTやガードメカが転がる。

『周囲の敵部隊を排除した。これより施設内部へと侵入する』

《分かりました。リンクスその先にある扉から侵入してください》

フィオナからの指示に従い、その扉から施設へと侵入した。

施設内のガードメカを破壊しながらシリエジオは目的の場所へと疾

走する。

すると

ピーッピーッ

けたたましくサイレンが鳴り響き、館内放送が流れる

緊急事態発生！ 被検体？00が暴走し、第4ブロックから第7ブロックに火災発生。施設職員は速やかに退避してください

その放送が終わると同時に、スミカが疾走する廊下の隔壁の一部が閉じられていき、最終的に一本道へと変わる。

その様子は、どこかに誘い込んでいます。と言っている様なものであった。

『畏か………良いだろう。その誘い乗ってやる』

スミカはそう言うとその一本道を疾走する。

side???

？013、お前はそこでリンクスの足止めをしろ

シンプルな広い闘技場の中心に俺は AC ストレイドを起動させたまま立っていた。

『分かったよ』

俺は俗に言う転生者とかいう奴らしい・・・いや憑依と言った方が正しいか

だが今はそんなことはどうでもいいか、研究者達は俺が戦っている間に逃げて、そして俺はここで使い捨てにされる・・・ただそれだけ。

思えば二度目の人生は碌な事がねえ

逃げようとしても無駄だぞ。逃げようとしたら、その機体が爆破されるからな

『分かってるよ・・・ったく、さっさと逃げりや良いじゃねえか』

首輪がついたまま、ここで死ぬのかねえ・・・せめて外の世界をこいつと一緒に見てみたかったかな

グオーン

ふと、正面の扉が開いた。

『来たか・・・リンクス』

相棒、最期まで俺に付き合ってくれよ

s i d e o u t

『来たか・・・リンクス』

スミカがアリーナに入ると、その中心には黒いACが立っていた。

『俺は？013。不本意だが、ここでお前の足止めをするように言われている』

『不本意？・・・なるほど、お前強化人間か』

『そうだ、これ以上語る必要はないだろう』

『それもそうだな』

二人は相対する。

『ストレイド、逝こうか』

《了解、戦闘システム起動》

それが合図となり、両者は戦闘を開始する。

シリエジオはOBで一気に距離を詰めながらレーザーライフルとレールガンを撃つ。

ストレイドと呼ばれた黒のACは放たれた弾をブーストを使い、紙一重で避けながら右腕のMWG-KARASAWAを構え一定の距離を保とうと撃ってくる。

それをQBで左右に避けながらミサイルを放ち、そのままストレイドへ突っ込む。

ストレイドはミサイル迎撃装置が働くが全てを迎撃が出来ずいくつが被弾した。

『くっ』

その隙にシリエジオはストレイドに体当たりをし

『がはっ』

壁まで引きずりぶつけた。

《コア損傷、腕部大破しました》

その衝撃でストレイドのコアがひしゃげ、腕部が大破し機体全体から火花が散る。

『ここ・・・までか』

そして満身創痍となったストレイドにレールガンを構え

『お前、生きたいか？』

スミカは聞いた。

ストレイド、いや？013は少しの沈黙の後

『生き・・・たい』

掠れた声で問いに答える。

すると

戦闘システム解除・・・データの損傷を確認・・・装着者の安全を確保・・・自律行動へ移行します

「スト・・・レイド・・・何を」

ストレイドが？013を機体から離し、シリエジオに預ける。

リンクス、彼をよろしくお願いします

『お前・・・』

私はもう持ちません。爆破装置が作動して時間がない。リンクス、彼と先へ進んでください

『分かった』

シリエジオはストレイドの意思を汲んで先へ進む。

「一緒に・・・外を・・・相棒」

シリエジオが先に進むとき、？013の音が確かに聞こえた。

そして二人がアリーナから出た後、一人残されたストレイド

もしストレイドが人間であつたなら、この時の顔はとても優しい顔をしていただろう。

私もあなたと外を見たかった・・・でもそれは叶いません・・・
だからあなただけでも生きてください・・・私にとってあなたは最
高のパートナーでしたよ・・・
■ ■ ■ ■ ■

そう最期に呟いて光に包まれた。

所属不明

研究施設の一室・・・・・・・・

そこには複数の研究者と魔導師がアリーナの戦闘を見ていた。

「死ななかったか・・・・・・・・プログラムが壊れたのか？」

「いえ、ストレイドがプログラムを書き換えたようです」

「上位命令を書き換えただと？ 道具風情が」

男は小さく呟く・・・その呟きは誰にも聞こえなかったが、その口元は憎悪に歪んでいた。

研究者達はストレイドが？013を逃がすという予期せぬ行動に困惑したが、目的の対リンクス戦のデータが取れたので気にはしなかった。

「所長、データを纏めました。すぐに逃げましょう！！」

研究員の一人がそう言った。

瞬間

研究室に爆音が響き渡り、研究室に一つだけあるドアが破壊され侵入者が姿を現す。

「な!？」

驚愕する研究者達、室内の二人の魔導師は反射的に魔力弾を撃ち放つ……が、紅の侵入者に当たる手前で緑色の粒子によって阻まれた。

「プライマルアーマーだと」

研究員の一人が声を震わせながら呟き、研究者達は自分たちが詰んでいることが分かり焦る。だが一人だけ冷静に憎悪に満ちた瞳でそれを睨み付けるものがいた。

「改修された管理者、イエルネフェルトの……」

所長の言葉は最後まで言い切ることは無かった。

侵入者のパルスキャノンが火を噴き、室内にいた人々を蜂の巣にす

る。

キャノンによって身体を焼かれながら引き裂かれ、あたり一面に血が飛び散る。

その威力は人を撃ち抜いた後も衰えず、その背後にある機械類を破壊した。

パルスキャノンの掃射が終わり、そこには瓦礫の山と物言わぬ屍の山だけが残っていた。

この惨劇を引き起こしたセラフは掃射のなかで、生き残っていた機械に近づき自分と直接接続し目的のデータを探し始める。^{リンク}

・・・そして目的のデータを見つけ、それを転送する。

『データ回収完了・・・これより施設の破壊に移る』

生き残っていた機械をブレードで破壊し、目的を完了したセラフはその場から去る。

そしてセラフが去った後、施設内では何度も破壊音が響き渡った。

研究所の建物はすべて瓦礫とかし、セラフはその瓦礫の上に佇んでいた。

作戦完了です。直ちに帰還し……いや待って、接近してくる機体を確認しました

フィオナからの連絡と同時にレーダーに三つの反応が現れる。

これは……所属不明ネクスト！？ 全部で三機よ、気をつけて！

驚愕するフィオナの声が通信から聞こえるが、セラフは戦闘態勢に既になっていた。

『博士、リンクスは』

彼女は被験者と共に先に離脱しました。援軍は回しましたが間に

合うかどうかは分かりません。なので一人で何とかしてください

『了解』

敵来ます！

三機の不明ネクストは隊列を組んで高出力ブレードを展開し突撃してくる。

そのスピードは超音速、オーバードブースト並であり搭乗者に高負荷、高負担を掛けているのは目に見えて分かるものだった。

『！？』

セラフは敵のスピードに驚愕する。が一直線に突っ込んでくるネクスト三機をクイックブーストで避け、両腕のパルスを一機に撃つ。

しかし、プライマルアーマーに阻まれ多少ダメージを与えるだけであつた。そして三機は再度突撃を開始する。

『武装はブレード・・・とレーザーか』

青のレーザーがセラフに放たれ、右腕部に掠りアーマーが削られる。多少はPAに護られるが直撃した場合は洒落にならない威力である。

三機のネクストはレーザーを照射しながら超音速でセラフを囲みながら突撃してきた。

それを確認したセラフは正面のネクストに向かってOBを使い接近する。

互いに超音速の中で間合いを詰めた二機、ネクストは展開されている高出力ブレードでセラフを切り裂こうとする・・・だが、セラフが変形したことにより回避され後ろをとられる。

背後を取ったセラフは飛行形態から人型へと変形、背後からネクストの頭部を掴み、零距离からパルスキャノンを浴びせ機能停止まで追い込む。

『自律型・・・・・・・・か』

そしてそのままネクストを掴んだまま他の二機のネクストを迎え撃つ。

後方から追っていたネクスト二機は左右から挟撃する形で突撃。

セラフはそれに対し掴んでいた物を左のネクストに投げつける。ネクストは投げつけられたそれを無造作に切り裂く。だがその行為が彼の運命を決めてしまった。

！？

切り裂いた直後の硬直で生じた、その一瞬の隙にセラフは彼我の距離を一気に詰めブレードで振り抜く。

振りぬかれたブレードはネクストを上下に分断し、ネクストは墜ちた。

セラフは急いで反転して迫ってくるネクストに対応しようとしたが・
・・・・・遅かった。

ヒュウン・・・・・ブウオン！

『っ！』

右腕部切断・・・コア破損・・・脚部損傷

セラフはブレードの直撃は避けたが、それでも当たってしまった場所の損傷は激しくコアは内部が剥き出しになり、右腕は焼き切れ、脚部は損傷により運動性能が下がっていた。

AP70%減少！？ セラフッ！！ これ以上は危険よ！ 撤退しなさい！

フィオナが叫ぶ。だがその場から撤退できるほどの速度はセラフにはもう無かった。

そして最悪な状況でも相手は待たない、待つはずが無い。相手は既に再度突撃を始めていた。

その姿を視認したセラフは自分がやるべき行動を開始する。

突撃してくるネクストに対し、セラフはただ相手を見据え待つ・・・
・・・ただ待つ。

そして

ネクストのブレードが当たる瞬間、オーバーブーストを発動させ胴

体を掴み自分諸共、地上へ突撃。

その時、相手のブレードが脚部を切り裂くがそんなのは関係なしに超音速で地面へネクストを叩きつける。

その衝撃でネクストは地面に埋まるが未だに稼動していた。だがセラフは地面に激突した衝撃で武装が使用出来なくなり、また大型ブースターも破損してしまっていた。

だが運命は彼を見捨てなかった。

ネクストが地面から這い出おうとした……その瞬間

バシュン・・・バシュシュシュシュシュ

空からハイレーザーとパルスキャノンの雨が降り敵ネクストを沈黙させる。

『随分と派手にやられたものだな・・・・・だが生きてて良かった』

空から降りてきた援軍はレイテルパッシュであった。

レイテルパッシュは全身から火花を散らしているセラフを支えると

『こちらレイテルパッシュ、セラフを確保これより帰還する』

飛び上がりその場から離脱した。

二機が去ったその後、破壊されたネクスト三機がまるで証拠隠滅のよう
に跡形も残らず爆散し消滅した。

sideファイオナ

『こちらレイテルパッシュ、セラフを確保これより帰還する』

「おつかれ様。帰還して」

レイテルパッシュからの連絡を受けた私はようやく安心することが出来た。

でも・・・セラフと戦闘をしたあの機体達は・・・・・・・・

「全て破棄されたはず・・・資料も父が全て焼き捨てたのに」

誰かが蘇らせようとしているの？

「悪魔の機体・・・プロトタイプネクストを」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8617p/>

魔法少女リリカルなのは 紅き熾天使が見つける答え

2011年11月13日11時45分発行